

## 図書館で働く非正規職員の実態調査

平山 陽菜

2009年の図書館員47,112人の内、図書館で働く非正規職員は28,677人と約6割を占める。日本図書館協会が非正規職員の統計を取り始めた1998年以降、その人数は増加し、今後も職員数に占める割合も高くなっていくことが予想される。図書館における非正規職員の役割が大きくなる中、非正規職員の実態を明らかにすることで、非正規職員の待遇改善のための情報提供や図書館の経営に関する研究などに貢献できると考えられるが、図書館で働く非正規職員に関する一般的かつ詳細な調査は少ない。

このような背景をふまえ、本研究では図書館で働く非正規職員の待遇や勤務時間、担当業務などの違い、非正規職員の満足度、正規職員との比較、過去10年間の経年変化などを調べ、館種や司書資格の有無と絡めながら多角的に分析する。非正規職員の実体を多角的に調査、分析するために本研究では3つの調査を行った。(1) 正規職員と非正規職員の両方を対象にした質問紙調査、(2) Webサイト「われわれの館」を利用した求人情報の調査、(3) 非正規職員及び図書館のアウトソーシング事業を行う企業へのインタビュー調査である。

その結果、図書館で働く非正規職員の平均時給が926円、平均勤務時間が33時間であることや、非正規職員の特徴が明らかになった。それら特徴は館種や司書資格の有無、雇用形態の影響を受ける。例えば館種では、大学図書館より公共図書館に勤める非正規職員の賃金が低く、平均時給で約100円の差があることや、大学図書館では正規職員と非正規職員の業務を分担しているが、公共図書館では非正規職員も正規職員と同等の業務を行っていることがわかった（管理など一部の業務は正規職員が担当することが多い）。司書資格を持っている職員の割合は正規・非正規職員で等しく、司書資格は求人や業務上で有用である。しかし、経験や外国語などと比較して司書資格は賃金に影響が少なく、また司書資格を持つ非正規職員は資格を持たない非正規職員よりも賃金の不満が高い。業務委託や指定管理者制度に関する研究では、直接雇用が間接雇用よりも非正規職員の待遇が優れていると指摘されるが、非正規職員の直接雇用と間接雇用の賃金や雇用期間で大きな差がないことも判明した。その他、保証の数や図書館で勤めることの良い点、悪い点、図書館に勤める理由などや、過去10年間で一般の短時間労働者の賃金は増加しているが、図書館で働く非正規職員の賃金は減少傾向にあることなどが明らかになった。

以上のように、本研究で一般的な非正規職員の実態を示すことができた。調査の結果から、司書資格の意義や図書館員の専門性などの問題を提起したが、最も大きな問題は非正規職員の待遇の低さである。待遇が低くても非正規職員として勤める理由は、図書館で働きたいが正規職員になれないためである。非正規職員の存在なくして図書館の運営が不可能な今、非正規職員の待遇を改善し、能力を高めて図書館に活かす仕組みが必要である。

(指導教員 辻慶太)